

特別活動の意義と指導

エピソード 「目標と目的」

2021/09/24

体育祭の種目 八の字跳びのグループ分けを行うとき、「先生が決めて」と声が上がった。目標と目的の話をした。

T:「目標とか、目的とかいう言葉があるよね。八の字跳びの目標は何？」

S:「1位になること」「上位入賞すること」「どべにならないこと」

T:「八の字跳びの目的は何？」

S:「力を合わせること」「協力すること」

T:「そうだよね。八の字跳びで目標は達成できなくても、目的は達成したいよね。」

生徒たちはこの話を理解して、グループ分けを自分たちで行うこととなった。

1 特別活動の意義

- 子どもが主体的に活動するチャンスである。
- 主体的に活動することで、色々なことを学んだり、様々な力をつけたりすることができる。
- 学校行事の取り組みを始めるとトラブルや問題が発生する。その解決に向けても子ども自らが動けるように指導や支援を行う。
- トラブルや問題を解決しつつ、学校行事への取り組みを続けることで
学校行事が高次元なものへとになっていく。
集団という考えに基づき行動するようになる。
子どもたちは人とのかかわり方を学び、様々な力をつけることができる。
子どもどうしのつながりが強くなり、学級も集団として高まっていく。
- 学校行事においても、トラブルや問題の解決においても、より高次元な結果を生み出した時には、子どもたちは高い達成感を味わい、自尊感情が高まる。リーダーとなった子は特にそうである。
- すべての子どもに一度はリーダー的役割(活動の中心的な役割)が担える機会を与える。
例えば、中学校では、「三年間に一度くらいは、学級委員や生徒会の各委員会委員をやらう。」と呼びかける。一年に一回は班長をしよう。一年に一回は行事ごとの実行委員をやらう。…
- 不登校の子どもにとっては、特別活動は非日常であることから、再登校のきっかけとなりえる。
運動会、修学旅行、卒業式に出るためにステップアップの取り組みをする。

2 特別活動の指導

- 子どもが主体的に動けるよう企画から運営まで任せる。(または、参加させる。)
- 活動するには、活動する時間、活動する場所、活動する道具や材料が必要である。すなわち、活動を行える環境を整える。
- 見守りや見届けが必要である。主体的に活動させることと、放任することとは別である。
- 取り組みを進めていくと、「もっとこうの方がよい。」と担任に訴えてくることがある。「そういうことは、先生に言いに来るのではなく、みんなに伝えなさい。」と指導することも多い。担任に訴えてくるということは、よりよくしたいという願いがあるが、他の子にどのように伝えるとよいのか戸惑っているのであろう。伝える機会を与えたり伝え方を教えたりするために、ペアや全体交流を使いたい。次のように指導してはどうだろうか。

例1) 合唱、劇、組み立て体操、学級対抗の競技種目などの練習で

毎回の練習後に、担任から、「今の練習で思ったことをペアで交流しなさい。」と指示をする。

ペアで交流した後、担任から、「全体に伝えたいことがあれば、どうぞ。」と発言を促す。

次の日の練習からは、教師の役割をリーダーがするように事前に指導しておく。
例2) 毎回の練習後に振り返りを行う。司会はリーダー(担当者の代表)が行う。

ペアで交流

全体で交流(全体に伝えたいことがあれば、どうぞ。)

次回の練習に向けて、

全体交流で出てきた練習についての意見は、意見を踏まえて担当者から直ちに提案をする。

全体に了解を取る。次回は、このことを確認してから練習を始める。

担当者から直ちに提案できないときは、担当者で次回の初めに提案する。

あるいは、帰りの会等で提案し了承を得ておく。

こういったことを続けていけば、次の特別活動から子ども自らが動き出すのではないだろうか。